

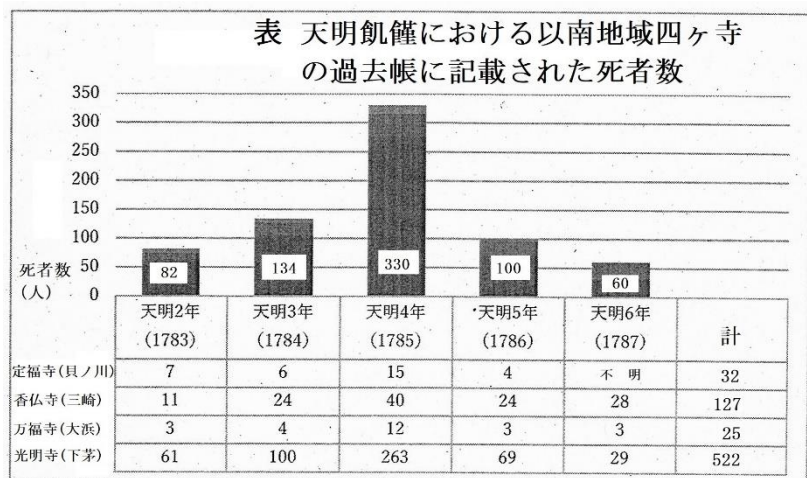
天明の飢饉と以南地域

飢饉は、天候不順、病虫害の発生等によって稲作が壊滅することにより各地方に甚大な被害をもたらす。その結果、食糧不足や餓死に直結していく。江戸時代を通じて発生した凶作は130回、そのうち大飢饉は21回である①。時代が下っていくにしたがって飢饉は次第に慢性的にしかも周期的になっていく。このような度々の飢饉で人が人を喰う非日常的惨状や、間引きの悪習の一般化②など、まさに地獄絵巻さながらの様相であった。なかでも享保・天明・天保の大飢饉は、江戸時代を通じて3大飢饉と呼ばれ、その惨状は今も語り継がれている。このなかでも最大の餓死者を出したのは「天明の飢饉」であった③。

この飢饉は、天明2～8年(1782～88)年までの六年間にわたり、東北から九州・四国に至る広範囲で天候不順(冷夏と長雨)が続き、凶作になったことに起因する。特に、被害が多かったのは東北地方である。冷害による凶作で大量の餓死者が出た。関東地方では、浅間山の噴火と重なり、降灰被害にも悩まされた④。

さて、天明の大飢饉のとき、以南地域(現在の土佐清水市域及び大月町月灘地区)はどのような状況であったのか。耕地の少ない以南では、特に米が高値となり、食糧が底をつくのは時間の問題だった。加えて、浦方においては台風によるカツオ船や廻船の破損があり、出漁や物資輸送もままならぬ状態であった。飢饉2年目(1783)には、野山の草の根や葉を摘み、それを食することにより何とか生きながらえた人々も、飢饉3年目(1784)の春には餓死者が続出する事態に陥った⑤。

表は、「天明飢饉における以南四か寺の過去帳記載の死者数」(『土佐清水市史・上巻』所収)である⑥。この過去帳記載の死者数が、すべて餓死者であるかどうかは判明しないが、下茅村(現在の下ノ加江地区)では、天明3年(1784)100人、天明4年(1785)263人も死亡している。この数は、当時700人弱の人口(『浦々諸縮書』)であった下茅村にとってあまりにも多す



ざる死者である。餓死者がこの数に相当含まれていたことはほぼ間違いないと思われる。一つの集落でこれだけの死者が発生することは明らかに非常事態であり、集落の壊滅的打撃である。

中村（現四万十市）の小野亮輔家に伝わる「先祖書」（万延元年〈1860〉六月書）に、天明の飢饉の頃の中村やその近辺の経済事情と飢饉の惨状について詳しく記されている。天明2～3年（1782～83）にかけて米相場が80文より96文に高値を付け、それに準じて物価が高騰し、天明3年（1783）夏には、遂に米相場は100文にまで上がって大混乱した。その混乱は、翌年まで続いた。以南地域に居住した人々が、中村近在の村々に食料を求めて浮浪した。中村の郷村でも飢饉による疲弊により分け与える食料もあるはずもなく、貧窮者は、次第に自然と中村の町筋に溜まり、街路ぞいの家屋の軒下に、日ごとに横死していく有様であった。そのことが、前述の「先祖書」に記されている。これらの人々は、地理的に見て、下茅やその近郷に居住していた人々ではないかと推測する。史料に記されていた米相場は恐らく一升あたりの相場であろう。現在の米相場（2020）を当時に換算すると一升約40文ほどであり、80文や96文がいかに高価であったかをこの換算から実感することができる⑦。

次に、以南地域の飢饉実態に関する史料として「天明飢饉の惨状」（『百味飯食』、山内文庫所収）がある。この中には、以南浦方の御分一役所の役人たちから飢饉の実態を藩に知らせた公的報告書であり、以南地域の天明の飢饉における実態を把握する上で大変貴重な史料となる。この中から布・下茅・以布利・窪津・伊佐（足摺岬）・大浜・中浜・清水の各村について、その実態をピックアップしていくこととする。

【布地区】

布では、天明3年（1783）9～12月までは椎の実を食べて住民は飢えを凌いだ。その後、クズやワラビの根などを食し、それらを食い尽くして正月を迎えた。このような末期的な状況を前に、布浦庄屋・貞次とその弟・乙助は立ち上がった。持ち米の3斗を住民に助米し、それをお粥にして配給した。そうして1週間ほど食べつないでいたのである。その後、幸運にも寒ブリが少しずつ漁獲されるようになった。住民は、これで何とか餓死して全滅することを免れることができた⑧。

【下ノ加江地区】

下茅浦では、天明3年（1783）の暮れまでは椎の実を食べて露命を繋いだ。正月からイワシ漁があり何とか食いつなぐことができたが、長くは続かず、時化のため沖に出ることもできない。庄屋・弁蔵も食糧確保について策を考えたが妙案はなく、浦人の人口も多いことから難儀している。藁をもつかむ思いで、救い米の申請を藩に提出した。まさに、集落全体が餓死寸前の緊張した状況が記載されている⑨。

【以布利地区】

以布利では、天明2年（1782）に漁も米作も不漁不作であり、1月中頃から貧窮して

困っている人々が集落に35～6人いた。その後寒ブリが少し漁獲され持ち直したが、再び不漁が続く困窮の極みとなり、御作配米を5石借りたいと藩に申請している⑩。

【窪津地区】

窪津では、冬場は鯨組の捕鯨に日雇いで就労し生活していたところである。最近鯨の漁もなく、困窮の度は日を増して厳しくなり、庄屋・関介がいろいろと手を尽くし救済している。山や海の食べられるものは食べ尽くした。また、藩直営の鯨組にも藩から支払われる扶持米が底をつく状態であった⑩。

【足摺岬地区】

伊佐浦は、紀州印南浦海民で伊佐浦において旅漁している魚屋・石橋善市が活発に救援活動を行っている様子がうかがえる。金剛福寺の住職を外護し、援助していたのではないだろうか。また、松尾庄屋より組頭に銀子が渡り、それをもとに塩造りがおこなわれ、住民の生計の成り立つようにと配慮された⑩。

【大浜地区】

大浜浦では、餓死寸前の者が92人ほどおり、庄屋・喜代丞が布浦庄屋弟の乙助から銀を借りて、粥等の炊き出しをするなど飢餓住民の救済を懸命におこなった。集落の貧窮を見かねて、お救い米の申請を浦役人が勧めるも、庄屋・喜代丞は、どの集落も貧窮しているとの理由から、お救い米の申請を藩に願い出していない⑩。

【中浜地区】

中浜浦では、庄屋や浦役人が2～3日交替で家々を巡回し、粥の配給をおこなっている。

【清水地区】

清水浦では生活難ではあるが、庄屋のいろいろな指導施策があり、塩浜の仕事もあるので、村人は何とか生きのびている状況である⑩。

「天明の飢饉」というかつて経験したことがない災禍が、18世紀後半、日本を襲った。全国的に餓死者が増加し、まさに地獄絵巻の様相を呈していた。このような未曾有の災禍は、以南の村々にも容赦なく襲ってきた。餓死寸前の状況のなかで故郷の先人たちは、庄屋を中心に一丸となってこの大飢饉を乗り越えようとしていた痕跡を近世史料から読み取ることができる。

今、世界では、コロナ禍というこれまで経験したことがない感染症が猛威を振っている。長期間、世界は混沌とした状況で覆われている実情である。1日も早いこの終息を祈るとともに、土佐清水市においても市民が、市長を中心にこの災禍を何とか乗り越えていかなければならないと考える。

註

⑩笠原一男『詳説日本史研究』山川出版社、1981年。

- ②近世中期以降の人口が2600から2700万人前後に停滞しているのは、飢饉における餓死や病死に加えて、口減らしのために生まれてきた子どもを殺す習慣が横行したことにもその一因があると考えられる。
- ③享保の飢饉は、享保17年(1732)に発生、西日本一帯にウンカが異常発生し、餓死者は全国で1万2000人以上発生した。また、天明の飢饉は13万人以上が餓死した。天保の飢饉では犬猫や垣根の植物まで食べ尽くすという惨状であった。このような大災害になった要因は、食糧不足のほかに領地ごとの支配構造になっている封建的支配制度が、その救済を大きく阻害した。
- ④①に同じ。
- ⑤①に同じ。
- ⑥天明年間の没者の名前が記載されている過去帳が残っている寺院は、下茅(下ノ加江)光明寺、大浜万福寺、三崎香仏寺、貝ノ川定福寺の4寺院しかない。
- ⑦中山進「五 近世以南漁業史」(『土佐清水市史 上巻』土佐清水市、1980年、1002～1010頁)
- ⑧⑦に同じ。
- ⑨⑦に同じ。
- ⑩⑦に同じ。
- ⑪⑦に同じ。
- ⑫⑦に同じ。
- ⑬⑦に同じ。
- ⑭⑦に同じ。

【編集後記】

第1章考古(出原恵三執筆)、第2章古代(東近伸執筆)、第6章近現代(田村公利執筆)の第1校(委託業者確認済み)が返送された。加えて、第9章学校教育史(谷岡暁美執筆)と第10章市政史(武藤清執筆)の原稿を事務局確認が終わり、委託業者へ送付した。第1校(委託業者確認済み)が後日返送される予定である。

また、既に第4章近代(田村公利執筆)、第6章以南偉人伝(田村公利執筆)のゲラ刷りが返送されてきた。すべての執筆分野で本年度中にゲラ刷りまでなんとか進めていきたいと考えている。第3章中世については、図表や写真が多く、その配置や処理に少し時間がかかりそうである。山城調査では、タクラ山城跡の調査ができておらず、今年度ギリギリまでレイアウトや資料整理に時間がかかりそうである。

第7章戦争遺跡についても同様である。

タイムリミットが少しずつ迫ってきている。闇雲に焦ることはないが、仕事と執筆の両立をしている編集委員さんもいる。厳しい状況はあるが、今日やるべきことは、今日やりきるとの覚悟が必要である。一点突破に期待したい。(田村)